

協会設立30周年記念講演会が開催されました 『宇宙生命哲学』事始め

——我々は何処から来たのか、今、何処にいるのか、
そして地球環境核戦争が始まった——

伊藤 俊洋氏（一般財団法人北里環境科学センター理事長）

——2017年10月7日、千葉工業大学2号館で行われた記念講演の要旨を紹介します。

人類は、今、文明の大きなうねりの前に立ちすくんでいる。地球規模での気象の異変、情報革命、格差社会、資源の枯渇、人種・人権問題、エスカレートするテロ、核兵器の拡散、そして蔓延するポピュリズム。しかし、これらはいずれも表面に現れた現象で、本質的な問題はもっと深いところに潜む得体の知れない実体のように思える。そもそも人が生きて行くことの意味、人間社会で個人が果たす役割、未来の子供達に託す課題、人生を爽やかに生き抜く心得。これらの課題を総括的に議論し、解決策を紡ぎ出すためには、文明の指針となる新しい哲学が必要であると考えます。その哲学は、子供からお年寄りまで総ての人々にとって、また、総ての国の人々にとっても理解できる易しい内容で、普遍的なものでなければならない。

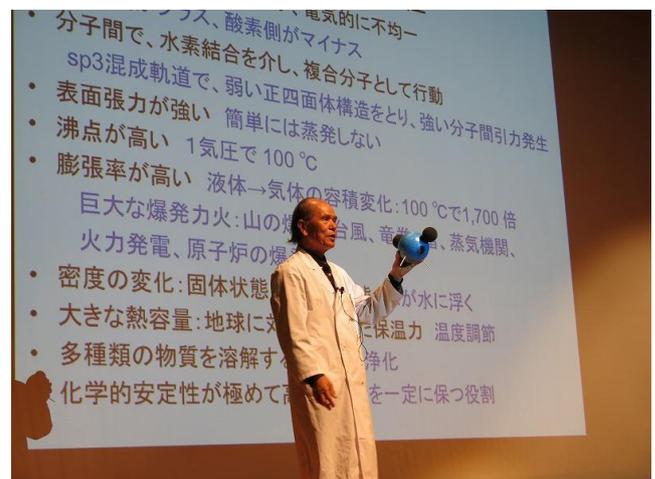
習志野市国際交流協会設立30周年を記念して、地球上の総ての生命に係わる新しい哲学：宇宙生命哲学を、近代原子論に基づいて提言してみたい。

地球上の総ての生命現象は、地球環境（大地、海洋、大気）に含まれる化学物質が織りなす循環の絵巻物と捉えることができる。近代原子論に基づいて考えると、38億年の生命史の中で起こった総ての生命現象は、化学反応、即ち、原子の中の電子雲（超高速で動く電子の軌道域）の変化として捉えることができる。人間の精神活動も生命現象の1つであると考えれば、現代文明の中核をなす政

治、経済、文化、芸術、宗教活動も、化学反応として、電子雲の変化として捉えることができる。もちろん、気候変動、地球温暖化、情報革命、生命工学、人工知能技術なども、基本的には電子雲の変化である。

人類の文明の未来は、電子雲の中に隠されていると断言しても過言ではない。電子雲を自在にコントロールすることにより、文明は確実に進化できるのである。人類は、まだ電子雲の入り口に辿り着いたばかりである。電子雲の中には、将来の人類のために大きな可能性が残されている。ここで最も大切な概念は、生命現象は電子雲の世界で循環しているということである。

しかし、72年前、人類は原子の中のもう1つの構成員である原子核を壊すことによって膨大なエネルギーを取り出し、核兵器として使用した。日本は最初の被爆国として甚大な被害を被った。その後、平和利用と称して生活のためのエネルギーを得るために、原子力発電技術が開発された。その結果、大量の原子核が日常的に破壊され、放射性核分裂生成



水の模型を手に語る伊藤先生

物が廃棄物として蓄積されている。この原発の廃棄物は、地球上の循環システムに組み入れることができず、人類の科学技術の粋を集めても、地球上の総ての富を積み上げても、科学的に安全に無害化することはできない。この現状を続けることは、地球上の人類を含む総ての生物と原発先進国との間の全く新しいタイプの戦争、「地球環境核戦争」の戦場に、我々は自らの身をおいていることを意味している。

人類は今、原発問題に対してぼんやりとした不安を抱き始めているが、それを直視しようとしな。我々はこの問題から目を反らしてはならないし、先送りしてはならない。この新しい環境核戦争の本質が理解できれば、冒頭に述べた文明の危機など、ものの数ではない。少々逆説的であるが、原発問題が人類にとって、史上最悪の環境汚染であるという認識を共有することにより、人類は、新しい概念のパラダイスをこの惑星の上に創ることができると信ずる。その目指すところが、「宇宙生命哲学」の本旨である。



講演後のパーティーで参加者に実験を披露